

いしかわの遺跡

No.
50
2016.1.29

「金屋」における鉄鍋生産を確認



三足を持つ鉄鍋鑄型の出土



調査区遠景 (白山方面を望む)

漆町遺跡は、小松市北部を流れる梯川の左岸に立地する集落跡で、本年度の調査は同市金屋町地内で行いました。室町時代後期から江戸時代初期の鑄物生産にかかわる炉や鑄型が廃棄された厚い堆積層、工房を確認しました。梯川に面した工房では、燃料や素材を搬入し、鑄型の製作や三足を持つ鉄鍋の生産、商品の運搬などを担っていたものと理解できます。

県内初となる完形の鑄型の出土と工房の確認によって、この時期の鉄鍋生産の実態が判明したことに加え、鑄物師の作業場などを意味する「金屋」の様子を、調査地の金屋町で初めて確認できたことは、大きな成果と言えます。

※ 鑄物 金属を溶かし、粘土などで作った型に流し込んで作った品物



出土した径 70cm 規模の溶解炉

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

TEL 076-229-4477

FAX 076-229-3731

E-mail ● mail@ishikawa-maibun.or.jp ホームページ ● 「いしかわの遺跡」で検索 (http://www.ishikawa-maibun.or.jp/)



や た し ん 遺 跡 (こ ま つ 市)
矢田新遺跡 (小松市)

矢田新遺跡は小松市月津台地の西側、加賀市境近くにあり、西に柴山潟、東に白山を望むことができます。今回の調査(第2次調査)で15世紀代を中心とする時期の遺物が見つかりました。

主な遺構は掘立柱建物、井戸、堀、地下式坑で、井戸1から大量のタニシの殻が出土しました。井戸の埋戻し時に捨てられたものとみられます。井戸2は直径6.5m、深さ6.4mと大型で、遺跡が台地上に立地し地下水位が低いため、深く掘る必要があって大型になったと考えられます。堀は幅4.4m、深さ1.8mで、V字状に掘られた薬研堀と呼ばれるもので、土砂の堆積状況から見て、水が張られていない空堀であった可能性が高いと考えられます。地下式坑は出入口の竪穴と地下の横穴で構成される特殊な遺構で、今回の調査で4基見つかりました。地下式坑1の竪穴は直径1.4m、深さ2.9mあり、続く横穴の床面は平面が長方形に近く、2.4m×1.9mの広さがあり、横穴の奥から銅製の小皿が見つかりました。

主な遺物には陶磁器、土師器皿など15世紀代の土器と石臼、茶臼(茶葉を挽く臼)、行火があり、石製品が比較的多く見つかっています。



井戸1のタニシ出土状況



井戸2の調査状況



堀



地下式坑1(天井部除去後)

H27
発掘
調査すぎのせ
杉瀬ニシウラB遺跡 (津幡町) つばたまち

遺跡は津幡町中央部にあり、津幡川とその支流である倉見川に挟まれた微高地上に立地しています。約100m南東の微高地上には、古代・中世の杉瀬ニシウラ遺跡があります。

調査は一般県道筋谷津幡線改築事業に伴うもので、新たに見つかった遺跡です。

調査区東半では、かつて蛇行していた津幡川が近代以降に埋め立てられた痕跡が見つかりました。

調査区西半では幅約5m、深さ1.5～2.0mの河道が見つかりました。川底は北に向かってかなり低くなっており、流木の堆積が見られました。調査区の北側にあった別の大きな川への合流部付近である可能性があります。河道堆積土の上層では須恵器、珠洲焼や鍛冶滓などが、中層から下層にかけては主に弥生時代後期の土器が出土しました。

調査区内では、ほかの遺構が見つかっておらず、また河道からの出土土器は比較的小片が多いため、上流で捨てられ、流れてきたものと思われます。遺跡の中心は調査区より南側の上流部にあったものと考えられます。



遺跡遠景 (赤枠が調査区 東から)



調査区全景 (北が上)



河道 (北西から)



河道の土器出土状況



ふつかいち みっかいち ののいち
二日市イシバチ遺跡、三日市A遺跡 (野々市市)

二級河川^{やすはらがわ}安原川の河川改修工事に伴って、野々市市二日市町・三日市町に所在する二日市イシバチ遺跡と三日市A遺跡の調査を行いました。二日市イシバチ遺跡はJR野々市駅から約500m南西に位置する弥生時代後期後半～古墳時代初頭と中世の集落遺跡、三日市A遺跡は二日市イシバチ遺跡の南東に隣接して広がる古代～中世の集落遺跡です。調査箇所はちょうどこの2遺跡の境付近に当たります。

二日市イシバチ遺跡の調査では、弥生時代終末期とみられる掘り方が布掘りの掘立柱建物^{ほったてばしらたてもの}や土坑が主に調査区の北側で見つかり、^{そうしよくだい}装飾器台などが出土しました。この時代の遺構・遺物は南側に行くにつれ希薄になります。中世の遺構は調査区北側を中心

としつつもほぼ全域で確認されました。それらの多くは屋敷地を区画する溝であり、土師器皿や馬の歯などが出土しました。

三日市A遺跡の調査では、古代後半と推定される耕作溝群や、中世の溝などが確認されました。調査区を東西に横断する溝の一つでは、溝底に小穴を連続して掘削しており、その覆土が固く締まっていたことから、道路として使用された時期があったと判断されます。また、他の溝では流水の痕跡が確認され、分岐する小溝へ導水したことが窺われました。これらの溝には二日市イシバチ遺跡の溝と繋がっているものもあり、両遺跡を一体的に捉えて検討していく必要があります。



掘り方が布掘りの掘立柱建物 (二日市イシバチ遺跡)



馬の歯出土状況 (二日市イシバチ遺跡)



溝底に掘削された小穴群 (三日市A遺跡)



流水痕跡のある溝 (三日市A遺跡)

環日本海文化交流史調査研究集会

平成 27 年 10 月 23 日(金)に「中世前半期における輸入陶磁器とその流通」をテーマとして、第 16 回環日本海文化交流史調査研究集会を、当センター研修室で行いました。この研究集会は、平成 12 年より毎年テーマを決めて行っているものです。今年度は、石川県で輸入陶磁器が一定量出土しだす 11 世紀頃を中心に、白磁や青磁がどのような背景で出現してくるのか明らかにすることを目指して、九州、山陰、東北および北陸の研究者をお招きしました。

九州地方は、鴻臚館や博多が大陸貿易の玄関口となっていたために、輸入陶磁器の出土量のみならず質においても他地域を圧倒していました。つまり、中国から輸入された陶磁器類は、そこで荷揚げされたのち各地域に移出していったのです。そのために、他地域と比較するときの基準として、輸入陶磁器が「いつ」「どのような種類」が出土しているのかを整理しました。

当時の政治の中心が、平安時代には平安京(京都)であり、鎌倉時代には鎌倉も加わることから、山陰や北陸などにおける出土量の絶対量はそれほど多くはなさそうです。山陰地方では古代以来の国府周辺に出土例が多いようです。中世に移行しても権力中枢の所在に大きな変化がみられなかったのでしょうか。

石川県では金沢市大友西遺跡や金沢市戸水C遺跡など、港湾にかかわりのある場所にある遺跡からの出土が目立つほか、加賀国府近くにある小松市浄水寺跡から出土した長沙窯水瓶など、山陰の状況と似ているようです。

鎌倉時代後半には居館である金沢市堅田B遺跡に代表されるように、輸入陶磁器類の標準的姿が示されるようになるようです。

最後の討論では、九州から東北地方の地域ごとに、青磁、白磁、その他の陶磁器類が 8～10 世紀、10 世紀後半～11 世紀、11 世紀後半～12 世紀、12 世紀後半～13 世紀、13 世紀後半～14 世紀の各時期でどのような種類が出土しているのかを検討し、各種陶磁器類の消長を確認しました。これは、これからの研究の基礎表となることでしょう。



地域別発表



活発な討論



討論の成果



資料見学会

H17
古代
体験

古代体験学習講座「弥生の琴づくり」

琴は、弥生時代まで起源がたどられる古い楽器の一つで、儀式の場で使われたものと考えられます。平成27年8月23日(日)に開催した学習講座では33名が参加して、長さ約60cmの小型の琴を製作しました。

製作モデルとしたのは、小松市八日市地方遺跡から出土した弥生時代中期の琴です。当時の琴は、板の裏に、振動した弦の響きを増幅させる箱(共鳴槽)が付くものと、箱が付かない琴の2種類に分けられますが、本遺跡の琴は木釘孔の存在から、前

者のタイプと考えられます。また、弦をかける板端部の突起は6箇所と推定されます。以上の特徴を参考に製作を行い、各部材は糊と木釘を使って組み立てました。琴糸は正倉院にある奈良時代の琴をもとに、絹糸を使用しました。

慣れない鋸による切断や、錐による32箇所もの孔開け、細い絹糸を1本1本張るのは難しい作業でしたが、苦労の上完成した琴の弦を指で弾いて発生した美しい音色を聴くことで、弥生文化を体感することができました。

①部材の準備



型紙を当て、下書き



難しい突起部の切り出しに挑戦

②部材の組み立て



木釘を打ち込む位置に錐で孔開け

④完成



出来映えに満足



完成作品

③琴糸を張る



突起に糸を掛け、ピンと張ります



接合面に糊付け



木釘を打ち込み、接合

古代体験まつり

平成 27 年 10 月 11 日(日)、県埋蔵文化財センターを会場に第 17 回古代体験まつりを開催し、約 1,100 人が参加しました。当日の天気予報が変化し、急きょ一部を雨天時の配置に変更しましたが、古代体験ひろばやセンター本館に設けた 23 の体験コーナーでは、昼頃からの降雨にもかかわらず、終日にぎわいました。

体験まつりで実施するメニューは、これまでに積み重ねてきた数多くのメニューの中から、絞り込ん

で構成しています。今回は編布づくりや縄文クッキーの試食などを久しぶりに行うとともに、本県の伝統的な工芸技術を実演、紹介するコーナーでは、輪島塗の曲物木地づくりを同市在住の木地師さんに実演、解説していただきました。

本館ホールでは地元の「末町ひょいひょい太鼓」、「金沢東高校和太鼓部」の力強い和太鼓演奏や飛び入りの太鼓打ち体験も行われました。

オープニングイベント



採火式

縄文の布づくり



アンギン(編布)づくりに夢中

縄文弓矢 狩人の森



ねらいを定めて

ステージイベント「和太鼓演奏」



高校生が太鼓打ちを指南

古代ファッションの店



古代の衣装は似合うかな

古代の大工さん



石斧で丸太を切断

実演 木の容器をつくる



板を曲げて弁当箱をつくります

縄文の土版づくり



土版ができた

農園収穫体験



棒でサトイモを掘ります

個人随時体験 古代の硯・木簡づくり

秋に実施した「古代の硯・木簡づくり」は、いしかわ教育ウィークに関連した個人随時体験のメニューで、平成27年10月31(土)～11月8日(日)に行いました。須恵器づくり用の粘土で硯を作り、木の板で木簡を作ることで、古代の文房具について学んでもらいました。

県内の発掘成果から、古代の文房具は律令制度の施行を裏付けるように広まり、墨で文字が書かれた木簡や墨書土器も、8世紀初め頃には出現し、後半に広がりを見せています。須恵器の硯は平安時代に円面硯から風字硯へと形を変えています。「古代の硯づくり」では、奈良・平安時代の硯は須恵器と同様に焼かれた陶硯で、その形は円面や風字状であった事を説明した上で、小型の風字硯を作り、後日焼成して渡しました。

一方、「木簡づくり」では、ヒノキの薄板に切り込みを入れて木簡の形を整え、両面に墨書してもらいました。体験者は、奈良時代に能登から平城京へ運ばれた海産物に付いていた荷札用の木簡や、平安時代の『和名類聚抄』にある郡名や郷名を参考に、オリジナルの木簡に仕上げ持ち帰りました。

また、年末の「木簡 年賀状づくり」は、木簡づくりの第二段で、11月28日(土)～12月13日(日)に、葉書の大きさの薄い板を使いました。体験者は、円面硯や風字硯を選んで墨を擦り、毛筆の練習をしてから本番の年賀状づくりです。年賀状を送る相手のことを考えて、年賀の言葉を書き、干支の申をイメージした絵などを添えていました。職員の「筆で書き損じても大丈夫、ナイフで削り取って書き直しができます」との説明で、安心して体験をしていました。

大人も子供も不慣れな毛筆に緊張しつつ、特製の木簡風年賀状づくりに取り組み、宛名書きや発送のために作品を持ち帰りました。



金沢市内出土の木簡



「木簡づくり」の様子



「木簡 年賀状づくり」の製作風景